

## 2018年度グローバル会計学会賞

大下勇二著『連単分離の会計システム—フランスにおける2つの会計標準化—』

(法政大学出版局、2018年9月25日刊行、492頁、6,500円)

### 【推薦理由】

本書は、フランスにおける連単分離の会計システムの形成過程を深く、かつ緻密に論究した研究書であり、重厚かつ格調高い学術書である。具体的には、①フランスにおける会計標準化の3つの側面、会計基準、会計基準の設定機関としての国家会計審議会、及び会計基準の適用から、個別会計次元と連結会計次元の標準化が異なるプロセスを経てきたこと、②両プロセスにおける国際会計基準・国際財務報告基準の影響に大きな違いがあることを明らかにしようとする。

本書は、次のような3つの特徴を持つ。

第1に、国際会計基準の導入をめぐる「連単」の「一体化—対—分離化」というグローバル会計問題の最も根幹的な課題に対して、フランス会計システムの形成過程という切りから解明しようとするものであり、課題の重要性・発展可能性を有し、本賞の趣旨にも適合する。

第2に、本書の大きな意義は、ミクロ財務的観点とマクロ経済的観点を統合した会計システムの構築を追求すべきではないかとの認識が提案されている点である。IAS/IFRSの「純利益—株主資本利益率（ROE）」指向の株式投資者の視点に加えて、付加価値概念などマクロ経済的観点をも加味した会計システムの構築は、長期持続的社會へのパラダイム転換の視点とも符合する。

第3に、国際会計基準の比較可能性と自国基準の文化的独自性と包含した会計システムのグランドデザインに対して実践的・制度的な示唆をもたらす。

以上、研究課題の重要性、研究視点の斬新性、及び制度設計への示唆など、本書はグローバル会計研究への貢献が著しく大であるとして、本審査委員会は学会賞を授与するものである。